



天明太平記

七

~ 13
3315
7



門へ13
3315
巻 7

一 吾妻の大御所御事一

天明五年記巻之七

大納言水基公はる 駿を東殿山に渡

あり奉

水基公は御界を付 右將軍おは御傷科

ありを何とあり 御城に御あり

忌候を御し 御御界を御し 御お櫃の

由お後侍將軍おは別まを悲し

何の御事 御御事あり

池清

友思道より故ら成心波舟に御察成
を言ひし事御之象御語成し曆中院
御舟登城と止れ是友寺の御舟登納
事なる御舟番御老中の中より大真
より東殿山納事づき首作おまより故東
殿山に御入格にお宿し徳和大納言
御他界諸國におまより故諸國の
御坊之格を侍り関東に下向し口元

次を以て御悔しと事言ふ江戸迄は
白幕を打掛依し面にお辭し御お格
宣しと別東殿山寛永寺に至りは
一山に御坊者にお席を御格を納言
一七月より中堂に於て一山並に諸國の集り
し御坊諸師を御誦し事誠天竺にて
事御格山に御法も是より事思ひ
形に江戸町に内坂町草尾所吉宗此人

右近少将行下道時お出停止なり
東殿山法度終りより一少初諸宗
の僧は布衣を端りりよる礼中上塔
圓と仰りりり身影中々管領及
和をを諸侯方々所毒廟石燈籠
其布終て指書。京都。京基云云他
界。上首奏聞。且。且。ハ禁廷。も。山。悔。の
勅。園。白。殿。下。介。作。り。と。御。領。官。者。未。院。殿

と號。り。の。皆。し。と。殿。氏。乃。計。の。こ。お。殿。方
之。殿。氏。一。指。極。若。若。豊。平。代。若。極。と。御
養。子。の。京。と。ま。り

時。の。之。殿。氏。平。雲。深。内。々。密。院。政。女。氏
富。早。御。中。院。も。明。り。和。西。内。様。御。遊。去
後。御。掛。内。お。淋。衣。且。指。友。何。年。将。軍。殿
山。進。り。中。と。若。君。様。山。崎。を。被。為。付。ハ。若
大。政。破。り。至。り。若。君。の。鳥。帽。子。新。也。と

為成河上高入三へくしを折至何なる
時扇中そ一橋様之主殿内山自足と成
家基公山中院山付ト上ハ一橋様也
何自そ方を義成青山扶殿河内及是
更ハ世中ノ山崎也成世及山作界ノ
極又世の人と云ハ物説是是神巨殿内
内心ノ計略を申し一橋様向ハ山
山極家基公山作界ノ上ハ山養子と云

るはお海もさる君若君豊平代君様也
河養也の西御也に京も有り皇女
御子も存也毎將軍也此為ハ二家物
君ハ自山極也心もたの〜成也
へ〜トト多時一橋様也此如ハ山顔也
ろ〜ら成也向もハ二考也首尾也此也
か世も成也ハ二考也路の如も万石也
へ〜と我を忘る宣ハハ成也成也

將軍亦大納言の基より所付を以て
折上機嫌の折を以て何れも
物者、口伝を以て所奉る、取寄りの
つゝと密に口約束す、一橋様は口折之
支分財を以て、登城し、所奉る、
思ひに折上奉る、一橋様は表沙汰に
門に召様方、所奉る、相定り、頼方、
密に將軍亦、口言と、及、口折上、
後

評定に及ぶ、將軍亦、口折上、
云々、及、口折上、
所請、口折上、
若君、口折上、
將軍亦、口折上、
與君、口折上、
時、將軍亦、口折上、
西、口折上、

おる者あゝハ海ト國及反計とあへて
作おまじり有界りたりとの語及は
て互及所ハ所ニ水様所ニ郷極を功り所
語代の諸侯方ハ女及養子所評定ハ
登城するも昔所城役を都りら故子陳西
語是互所も殿中ハ評定ハ席ハお仕
是より互及所諸侯方ハ向ハ女及將軍
忠若君様ハ忠なる好互及昔所上もそ一様

若君昔々千代君様ハ養子なる好互及也作也
たあも何仕らるも昔々所諸侯方一云
もやあも方あゝ互及所押是と昔々千代
君様ハ眼筋ハ血脈とら故女君様
とお者ハあまらと村河段ハ昔々所若君様
方も互及所評定とあは將軍あは古目禮
とも教もあまらと口語ハあまら故也ね
若君上ハ士目と撰ハ西ハ也ハ入集也

さるべしと山評定流り海をも引返す後

將軍家諸侯方由西知首上聞達は是

口評定入せしむる故に及死鉄の一橋様

より豊千代石原口伏防一西の如入も

りて是より女首所より後初り諸侯方由

けしむ候に諸侯方より死難あり故に

是より將軍家より一西の如入も

より及死計りて及死ありお海は

廿上を平を賀し一書

田原より及死流津あり故に

天行達あり入一書

後より及死平賀津内より向の川養

屋好お海は音中より時津内より

係を進めり故に豊千代様西の

まのより天行を中振り成るも

海はより川養様より川原を



活言ありては為に海とては後より公活津
ありては西に相い入樂ありては及既計
ひのそ首尾好お整の山崎烟しは能武の拳
て是く箱く沙有ありしは成地をそ知るべし
別吉自良辰と撰くしは神也ゆより活津大
まの依りて山入善松とては山由連ひの
まふ所は婦ありて大真の山年未は活津中花
山妻ありしは活津中花山侍活あり

大納言様山崎烟居りては及既計あり
將軍ありしは山崎のりて備ありしは及既計
ありては西に相い入樂ありては及既計
ひのそ首尾好お整の山崎烟しは能武の拳
て是く箱く沙有ありしは成地をそ知るべし
別吉自良辰と撰くしは神也ゆより活津大
まの依りて山入善松とては山由連ひの
まふ所は婦ありて大真の山年未は活津中花
山妻ありしは活津中花山侍活あり

そこの方以て吟味し上中へてしと云語言ふ
り女系高と客談録述り及ぬ老丹上
侍御中へ松中幸左衛門を以てし以て
亦一合を別松中を以てし自ら詩を柳成
て松中侍進と改名作身と改て平儀
沼宮参り亦ありは女中儀沼宮参り
勅定事り神尾高俊と名を以てし
次子と云神尾高俊と名を以てし沼宮あり女中

之中より高俊と名を以てしと云語言ふ
り女系高と客談録述り及ぬ老丹上
侍御中へ松中幸左衛門を以てし以て
亦一合を別松中を以てし自ら詩を柳成
て松中侍進と改名作身と改て平儀
沼宮参り亦ありは女中儀沼宮参り
勅定事り神尾高俊と名を以てし
次子と云神尾高俊と名を以てし沼宮あり女中

吹送るる夏清冷き三拍り一五日
と利根川押おし山崎の港一
島は国赤海を大木を人氏と島
と流るるの秋を水に有る多き
門の儀様より山崎をわし国の人
民を物家進へて人連来り友國
の山崎を越へて山崎中橋より山崎
五町より曲剛甲斐守及山村
伊藤

子鶴の宿民の夏食を右
友を在る山崎の伊藤と
を山崎の山崎の伊藤と
ハ山崎の山崎の伊藤と
を山崎の山崎の伊藤と
らるる山崎の山崎の伊藤と
を山崎の山崎の伊藤と
水も清冷く人氏と島

まゝ山神の神ありて圓なる山ありては麓

まづこの山の神ありては麓に記す

神のまゝに別勅命を記す日吉に記す

内神並科澤を記すありて是を大内神

と唱ふ海に山ありて頂に一帯に内山

八ヶ岳山脈地ありては里に西宮あり

此の神樂を奏すて澤で神徳を傳ふれ

神の山に神を勅語伝ふり山に神

古事ありて信長澤ありて大内神ありて水神

新に山に山に神を傳ふり別神あり

流ありて必しも標西澤に入つては又山

流ありて必しも標西澤に入つては又山

大内神ありて二千里ありては山に成つては神

流ありて必しも標西澤に入つては又山

中より今天の二千里ありては山に成つては神

山に成つては神ありては麓に記す

山に成つては神ありては麓に記す

山に成つては神ありては麓に記す

山に成つては神ありては麓に記す

此より泥鰌より糞の田
十ヶ村田畑ハ中々及ぶ
一 天より雲霧降り吐く毛更り砂塵
階一 甲冑ハ勿論信長は上野身は
石砌一 階一 所ハ甲冑方あり城由
の智の眼あり麻中ゆき東敵山免
永年之錦山横上幸也神の宿寺宿山天
下幸年一 河折橋 將軍あり山物忌

信あり一 所一 寸目斗を時一 所一 宿り
故一 所一 多一 所一 及一 人一 あり一 是一 所一 一 所一 死一 人一 牛一 馬
救一 了一 一 所一 あり一 村一 郡一 由一 案一 因一 一 所一 者一 あり一
城一 由一 新一 田一 官一 祭一 月一 あり一 あり一 あり一 あり一 あり一 あり一
在一 所一 一 所一 田一 地一 一 所一 あり一 あり一 あり一 あり一 あり一 あり一
あり一 あり一 あり一 あり一 あり一 あり一 あり一 あり一 あり一 あり一
中人政を執時ハ其言也
くある天地神の何進也

復城
あづき忍

